

氏名	秋場 敬浩
ヨミガナ	アキバ タカヒロ
学位の種類	博士（音楽）
学位記番号	博音第251号
学位授与年月日	平成27年3月25日
学位論文等題目	〈論文〉 サムイール・フェーインベルク研究 ーピアノ・ソナタ第11番を巡る自筆譜と回想録に基づく演奏解釈的考察 〈演奏〉 J. S. バッハ（S. フェーインベルグ編） ラルゴ イ短調 Op. 38(トリオ・ソナタ 第5番 ハ長調 BWV529 第2楽章) S. フェーインベルク ピアノ・ソナタ第2番 Op. 2 S. フェーインベルク ピアノ・ソナタ第6番 Op. 13 S. フェーインベルク ピアノ・ソナタ第10番 Op. 30 S. フェーインベルク ピアノ・ソナタ第11番 Op. 40

論文等審査委員

(主査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	渡邊 健二
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	伊藤 惠
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	大角 欣矢
(副査)	東京藝術大学	教授	(音楽学部)	野平 一郎
(副査)	立教大学	教授		星野 宏美

(論文内容の要旨)

本論文は、作曲家フェーインベルクの実像の深層部に迫る試みとして、彼の創作様式の変遷過程における最上層に属する後期作品の一つ、ピアノ・ソナタ第11番を多角的に考察し、新たな作品像を提示することを目標としている。論展開にあたっては、まず、彼の人物像に関連する伝記的情報の提示、および、第11番以外のソナタや他ジャンルにおける創作様式に関する概観的考察を行い、本題となるソナタ第11番の分析に際しては、これまで全く検証されることのなかったロシア国立文学芸術アーカイヴ所蔵の自筆譜、そして、フェーインベルクの高弟であるヴィクトル・ブーニンによって新たに書き下ろされた作曲者自身の実演に関する回想録を用いながら、フェーインベルクの作曲プロセスの舞台裏にも光を当てつつ、筆者の演奏家としての視点を交えた解釈的考察を行った。本論文におけるこのようなアプローチや視点を通してフェーインベルクの独創的な作品像に迫ろうとする試みは、これまでのフェーインベルク研究の国際的展望においてはみられず、日本国内においては全くもって初めてのフェーインベルク論ともなった。

論文の全体構成は、作曲家フェーインベルクの生涯を巡る第1章、彼のオリジナル作品を主軸とした創作体系を概観する第2章、そして、ソナタ第11番の演奏解釈的分析が展開される第3章から成っている。第1章では、ブーニンの1999年の著作『サムイール・エヴゲーニエヴィチ・フェーインベルク——生涯と創作 Самуил Евгениевич Фейнберг: Жизнь и творчество』を基本資料として参照しつつ、必要に応じてその他の副次的資料からの情報も交えながら、フェーインベルクの幼少期から晩年に至るまでの伝記の流れにおける最新の情報を提示すべく心を配った。第2章では、作曲家フェーインベルクのオリジナル作品（編曲作品については扱わない）について、ジャンルごとに概観的考察を行い、個々の作品の大まかな特徴が彼の創作様式の変遷の流れの中でどのように表出しているかということに主眼を置きつつ論を展開した。そして、第3章では、第1節においてソナタ第11番の分析を行うにあたって主軸となる自筆譜とブーニンによる回想録の資料的特

徴を述べ、第2節においては作品の構造分析の流れにおいて、自筆譜と出版譜との比較によって見出される相違点を検証し、とりわけ演奏解釈上において少なからぬ影響を与え得る差異にフォーカスをあてつつ、ブーニンによる証言と筆者による見解を捕捉しつつ作品像を浮き彫りにすることを試みた。

研究成果としては、フェーインベルクの創作様式の進化における最終形態を示すピアノ・ソナタ第11番の構造分析と、自筆譜およびブーニンによる回想録を通じた考察を併行して展開することによって、フェーインベルク作品の演奏解釈を巡る新たな地平を垣間見ることができた。各資料を用いての検証においては、次のような成果が得られた。すなわち、楽想の性格やテンポに関する標語、デュナーミク記号の加筆によって複雑化した最終稿（初版）におけるテキストを、作曲当時の直感的靈感を留める自筆譜に立ち返った視点と重ね合わせつつ、様々な相違点や記譜上の特徴に注意深くフォーカスをあてることによって、最終的に作曲者が強調しようとした表現意図や構想の意義がより鮮明に浮かび上がってきたのである。また、もちろんのこと、初版やナタンソン版において生じた誤植や一貫性のない記譜を正し、より純度の高いテキストを再構成することにも繋がった。また、作曲者自身の響きを実際に耳にし、彼の表現手法を実際に体得した人物であるブーニンによる証言を交えての考察は、作品に秘められた芸術的構想の謎を解き明かす鍵となり、音響的具現化のためのアウトラインとしての楽譜における限界点を捕捉することに繋がった。

#### （総合審査結果の要旨）

「サムイル・フェインベルグ研究—ピアノ・ソナタ第11番を巡る自筆譜と回想録に基づく演奏解釈的考察」と題された本論文は、ロシア＝ソ連時代のヴィルトゥオーゾピアニストとして語られることが多いサムイル・フェインベルグの「実像の深層部」に迫り、特に、秋場がフェーインベルグの創作様式の変遷過程における最上層に属する後期作品の一つと評価するピアノ・ソナタ第11番について様々な観点から考察を加え、より作曲者の意図に添った演奏解釈を導き出すことを目的としている。

秋場は、まず、第1章及び第2章に於いて彼の生涯と創作について概観した上で、第3章に於いてピアノソナタ群の概略について述べると共に、第11番のソナタについて詳細に考察を加えている。

そのための資料として、一般に公開されているもの、或いはプライベートなもの（特にフェーインベルグ自演のプライベート録音）など現時点で入手可能な資料や情報を丹念に収集し、可能な限り調査を進めた上で論文を執筆していることは高く評価できる。とりわけ演奏解釈の考察に当たって、フェーインベルグの高弟であったヴィクトル・ブーニンから秋場に送られたフェーインベルグ自身による第11番ソナタ演奏についての「回想録」を踏まえているのは、本論文の特徴の一つと言えるだろう。

本論文の中核をなす第3章の「演奏解釈的分析」は、楽譜の微細な部分に至るまで入念な読解を行い、全体と細部の有機的な関連を把握し、フェーインベルグの詩的・哲学的想念を蘇らせる試みと言えよう。それは、自筆譜から初版本への改訂のプロセスを丁寧にたどり、ブーニンの「回想録」に述べられたフェーインベルグの演奏イメージに、秋場自身の演奏家としての詩的感性を加味しながら考察することにより、概ね成功していると言える。

演奏審査においては、フェーインベルグの編曲によるバッハのラルゴに始まり、フェーインベルグのソナタより、創作の変遷を表すのに相応しい第2番、第6番、第10番、第11番の4曲が演奏された。広大なデュナーミク、多彩な音色、複雑なポリフォニーに於いても決して混濁しない優れたコントロールによって演奏された各曲は、それぞれの性格が明瞭に弾き分けられており、特にフェーインベルグの難渋なソナタ群を、一瞬たりとも弛緩させること無く聴衆を惹きつけ大きな感銘を与えたことは素晴らしい。第2番での即興性、第6番での深い哲学的な想念、第10番での名技性、第11番での宇宙的な世界観はとりわけ印象に残るものであり、秋場が第一級のピアニストであることを示すものであったとあって良いであろう。

秋場が学位審査を通して、現在まであまり注目されてこなかったフェーインベルグのソナタが、普遍的な価値を持ち、ロシア音楽史上に大きな地位を占める重要な作品であることを、論文のみならず、その演奏を以て明確に示したことは、特筆すべき成果と言って良いと思われる。

なお、論文については、より精密な注釈の必要性、自筆譜と初版本の「読み」についての記述箇所、タイプミスなどの瑕疵、フェーインベルグと彼を取り巻く作曲家や他の芸術分野との関連についての視点がもう

少し加味されていたらより膨らみのある論文になったであろうという指摘があったが、論文の価値そのものを損なう程のものでは無いと判断された。